

平成22年度

# きらりと光る広報の取組

## —「わかりやすく、理解してもらえる 広報」を目指して—

北海道開発局開発監理部広報室

○後藤 慶作  
池田 亮子

平成22年度に北海道開発局職員が行った広報の取組の中で、報道機関で報道された5件の広報事例について、報道提供資料（記者発表資料）の見出しや内容、レイアウト及び発表のタイミング、さらに、取材対応などをそれぞれ検証し、全体としてどの点がインパクトのある広報であったのか、をケーススタディとして整理した。併せて5件の広報事例から、北海道開発局職員が広報を行う際に留意すべき点や心がけておくべき点を示すことにより、今後の職員の広報技術に係るスキルアップを期待するものである。

キーワード：インパクトのある広報

### 1. はじめに

北海道開発局の様々な取組を、広く一般の方に理解していただくためには、積極的な情報発信とあわせて、報道機関や一般の方に「わかりやすく、理解してもらえる広報の取組」を実施していくことが必要である。この取組を「きらりと光る広報の取組」と呼んでいる。

本稿では、平成22年度における5件の広報事例（局長定例記者会見の話題3件、開発建設部での話題2件の計5件）を紹介し、国民・道民からみた広報という観点から、わかりやすい報道提供資料となっているか、報道提供資料の良いところと課題、取材を受けた際に留意した点、などをそれぞれ検証した。

きらりと光る広報の取組を、今後さらに充実させていくことにより、職員一人ひとりの広報技術に係るスキルアップを図っていくことで、広く国民・道民の方に当局における様々な取組について理解を深めていただけるものと考えている。

### 2.インパクトのある広報とは

#### (1) 広報を取り巻く現状と課題

北海道開発局から報道機関へ提供された情報は、報道機関から広く国民・道民へ提供されている。

報道機関への情報提供、すなわち記者発表においては、国民・道民のために北海道開発局がどのようなことを行うのか、その結果何がどうなるのか、その施策等の内容を正確に、かつわかりやすく伝えていく必要がある。

そのためには、正確性、客観性等に留意しつつ、報道機関や国民・道民の目に留まりやすい工夫（内容

が一目でわかるタイトルを付けてアピールするなど。）を施して情報発信を行うことが特に重要である。本稿において「インパクトのある広報」とは、わかりやすくかつ目に留まりやすい広報と定義する。

「きらりと光る広報の取組」とは、創意工夫を重ねてこの「インパクトのある広報」を実践していくことである。

#### (2) 広報にあたり留意すべきこと、心がけること

インパクトのある広報を行うためには、国民・道民の視点から見た広報、すなわち報道機関の視点に立つて国民・道民にわかりやすく説明するスタンスを心がけていかなければならない。

そして、実際にインパクトのある広報を行うためには、様々な方法が考えられるが、主な留意点として、

- 1) 目に留まりやすく、興味を持ってもらえるような記者発表資料の書き方
- 2) アピールできるニュース性
- 3) 報道してもらえやすい記者発表のタイミング
- 4) 迅速、丁寧な取材対応

などがある。

この4点を具体的に言うと

1) 「記者発表資料の書き方」では、プレスリリースについて一般的には、

- ① 見出し（タイトル）が決め手〜創意工夫して簡潔ですぐわかる言葉を考えること
- ② 結論を先に書くこと
- ③ 文章は短く、1文3行以内に止めること
- ④ レイアウトは見やすく

などに留意し作成する必要がある。

次に、2) 「ニュース性」について、一般的には、

- ① そのときの世の中の動き、関心にマッチしている
- ② 初ものである（わが国初、道内初等）
- ③ 珍しい
- ④ 絵（映像）になる

などが関心を誘うと考えられる。

3つ目の 3) 記者発表の「タイミング」について、イベント開始前や供用開始前など適宜のタイミングで行い、ビッグニュースがあるときは控えるなどの気配りも必要である。

最後に、4) 取材対応について、とにかく誠意を持って丁寧に取材対応を行うということである。特に、専門的な事項をわかりやすく一般的な表現で説明すること、そして「ニュース性」を強調すること、また写真やデータの提供依頼を想定し、あらかじめ準備しておくことも大切である。

### 3. 広報事例5件を検証～“初”ものに高い関心

平成22年度における北海道開発局の広報の中から、5件の広報事例について、見出し（タイトル）、ニュース性・記者発表のタイミング、説明内容・資料のレイアウト、取材対応などについて検証した。

- (1) 「船舶版アイドリングストップによりCO2削減に貢献します～釧路港における船舶への陸上電力供給施設の供用開始について～」（5月18日・局長定例記者会見、港湾空港部港湾計画課）

【報道機関提供資料】

平成22年5月18日  
北海道開発局

**船舶版アイドリングストップによりCO2削減に貢献します**  
～釧路港における船舶への陸上電力供給施設の供用開始について～

このたび、釧路港東港区北地区（フィッシャーマンズワーフMOOの前面）において、平成21年9月から北海道開発局が行ってきた実証実験の終了に伴い、陸上電力供給施設の供用を開始しました。19トン級の本州からの船舶を対象とした施設としては道内で最大（12隻が同時利用可能）となります。

船舶版アイドリングストップを実現する本施設は、主に8月～11月のさんま漁期に本州からの船舶により利用されることとなりますが、年間で1,800万円（1隻当たり40万円）の燃料代の節約に資するほか、周辺の環境改善、排出されるCO2削減（年間合計400トン）等が図られることとなります。

なお、北海道開発局では、函館港、苫小牧港でも船舶版アイドリングストップの実現に向けた取り組みを進めています。

釧路港東港区北地区全景

陸上電力供給施設

- 1) 見出しについて  
一般の人にわかりやすく関心を持っていただけるよう、「CO2削減に貢献」を強調した。タイトルとサブタイトルを一見すると何のことかすぐわかる資料の見出しになっており、報道提供資料のタイトルの良い事例である。

- 2) ニュース性、記者発表のタイミング  
漁船対象施設として“全国初”であること、供用開始（5月6日）後からまもなくの記者会見での話題提供であったことからタイムリーでニュース性が高かった。

- 3) 説明内容・資料のレイアウト  
資料の説明文については簡潔で、効果を具体的に数量で示すなどわかりやすい。

レイアウトは、写真は大きくし、削減効果をグラフで示すなど、工夫しており、見やすい資料である。

- 4) 取材対応  
写真や関連データの提供など、報道機関からの依頼や記者からの取材に迅速に対応している。

- 5) 検証結果  
環境、コスト減、日本初ということで、新聞やテレビで大きく報道された。「2 (2) 広報に当たり留意すべきこと、心がけること」の各項目を全て満足したものであった。

- (2) 「農業・河川・地元自治体の連携による直轄河川堤内排水路の総点検結果について～農地の排水不良を改善します～」（6月23日・局長定例記者会見、建設部河川管理課）

【報道機関提供資料】

平成22年6月23日  
北海道開発局

**農業・河川・地元自治体の連携による直轄河川堤内排水路の総点検結果について**  
～農地の排水不良を改善します～

実施または調査中の国営農業農村整備事業（11地区）と国管理の13水系のうち、平成21年度の長雨や大雨による農地の被害状況を踏まえ、耕作地帯を流れる十勝川、常呂川、網走川、湧別川、津別川の5水系を選定し、河川の堤内排水路30箇所、延長80kmを、農業・河川・地元自治体の職員が合同で点検しました。

その結果、土砂が堆積し、流れがよどんでいる、排水不良改善の対策が必要な箇所は19箇所、延長2.8kmでした。そのうち、対策の優先度が高い11箇所、延長約5.1kmについて、河川事業において早急に床ざらい等を実施します。

これにより、国営かんがい排水事業などで整備される排水路の改良効果を高め、農作物の湛水被害の軽減を図ります。

写真-1 基別町との点検状況（十勝川）

写真-2 堤内排水路土砂堆積状況（十勝川）

1) 見出しについて

「農業・河川・地元自治体の連携」を強調し、サブタイトルの「農地の排水不良を改善します」も堅いが、内容はわかりやすい。

2) ニュース性、記者発表のタイミング

点検結果がまとまり記者会見で話題提供したところであり、タイムリーではあったが、いわゆる“初”もの、トピックものではないので、ニュース性があまり高くなかったと思われる。

3) 説明内容・資料のレイアウト

資料の説明文は、簡潔明瞭でわかりやすい。レイアウトについては、写真を大きくしており、見やすい資料である。

4) 取材対応

報道機関からの問い合わせは特になかった。

5) 検証結果

新聞の報道は少なかったが、「農業・河川・地元自治体の連携」を強調した報道提供資料自体は簡潔によくまとまっている。

点検結果の発表と合わせて、排水不良の現場での取材を組み合わせるなどの工夫の余地があったのではないかと指導すべきであったと思われる。

(3) 「茨戸川の水環境の改善を図るために石狩川からの導水を開始します」（8月4日、本局で記者説明会・札幌開発建設部で記者発表、札幌開発建設部河川計画課）

【報道機関提供資料 表紙】

国土交通省 Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism Press Release

報道機関各位

平成22年 8月 4日  
札幌開発建設部広報課  
電話 011-0275  
(ダイヤルイン)

お知らせ

件名 茨戸川の水環境の改善を図るために石狩川からの導水を開始します

お知らせ内容

札幌開発建設部では、札幌市や石狩市、地域住民、学識者と協働で協議会を設立し、茨戸川を始めとする札幌北部の河川で、水環境の改善に取り組んでいます。

協議会では、札幌市の「水と緑のネットワーク構想」を具体的に進めるため、茨戸川及び北部地区の河川の水環境改善を目指して、「石狩川水系茨戸川及び札幌北部地区河川水環境改善緊急行動計画（茨戸川清流リネッサンスII）」を、平成19年9月に策定しました。

この計画に基づき、流域一体となって、茨戸川及び札幌北部地区河川の水環境の改善に取り組んでいます。

札幌開発建設部では、既に豊平川の水を鶴ヶ川から創成川を通し石狩川へ導水する創成川ルートにおいて、平成19年度から導水を開始しています。

今回は、石狩川の水を茨戸川の上流へ導水し、石狩川ルートによる茨戸川の水環境改善の取組を開始しますので、お知らせします。

この石狩川ルートは、茨戸川が石狩川から切り離された昭和8年以降、77年ぶりに茨戸川の上流と石狩川を導水樋門でつないで、導水するものです。

本年度は平成22年8月5日（木）から平成22年11月30日（木）まで導水を行い、水質の監視や効果の把握を行います。

所 属	役 職	氏 名	電 話
問い合わせ	河川計画課	山田 共美	011-611-0329 (ダイヤルイン)
	流域計画室		
せ 先	所 長	山下 彰司	011-561-3235 (ダイヤルイン)
	第1工務課長	鈴木 健治	011-561-3215 (ダイヤルイン)

札幌開発建設部 ホームページアドレス <http://www.so.hkd.mlit.go.jp/>

石狩川流域 100年の歩み、未来へ...  
2010年(平成22年)15周年記念事業100年を記念します

1) 見出しについて

具体的にどのようなことをするのか興味の湧くタイトルである。

表紙の下から4行目で「77年ぶりに茨戸川の上流と石狩川を導水樋門でつないで、導水するものです」とあり、表紙を一通り読むと内容がよくわかるが、興味を誘うようなサブタイトルを付けるなど、見出しにもう一工夫することをアドバイスすべきであったと思われる。

【報道機関提供資料 2頁～4頁】

茨戸川の概要

茨戸川は洪水対策を目的とした捷水路工事により、昭和8年に石狩川利川から切り離された延長約20kmの旧川で、札幌市街を流れる多くの中小河川が流入しています。

利用状況としては、札幌、石狩市民がボートや釣り等を行っています。また、茨戸川全域でワカサギ等の漁業が営まれているほか、周辺地域の農業用水として利用されています。

茨戸川には札幌市及び石狩市の都市排水が流入しているためアオコが発生するなど水質が悪化しました。このため、昭和53年から遡上・下水道・導水事業を実施するなど、水環境の改善を図っています。

流域面積：約160.5km<sup>2</sup>  
茨戸川の水深：平均2.8m(最大14.5m)  
主要流入河川：創成川、豊平川、伏龍川  
沿川市町村人口：約194,278人(H20.3.31住民基本台帳：札幌市・石狩市)

SS7アオコ発生状況  
H22アオコ発生状況  
アオコ発生回数

年度	発生回数
平成10年	19回
平成11年	8回
平成12年	10回
平成13年	0回
平成14年	0回
平成15年	0回
平成16年	0回
平成17年	0回
平成18年	0回
平成19年	0回
平成20年	0回

近年でもアオコが確認されています

図-1 茨戸川流域図

清流リネッサンスIIの概要

平成15年3月に河川管理者、関係機関等が協働し、茨戸川及び北部地区の河川の水環境改善を目指して「石狩川水系茨戸川及び札幌北部地区河川水環境改善緊急行動計画（茨戸川清流リネッサンスII）」を策定し、流域一体となって取組を推進しています。

清流リネッサンスII（水環境改善緊急行動計画 平成15年3月策定）

茨戸川では、BOD3mg/lを達成することで、生物の生態環境の向上、積極的な親水利用、美しい水面景観の保全を図ることができると期待を目標とする。

札幌北部地区河川では、せせらぎ回復、豊かで清らかな水辺環境の創出等、水環境の改善を目標とする。

創成川ルートの目的  
・茨戸川の水質改善  
・札幌北部地区河川の浄化（維持）用水  
創成川、新等川、発寒川  
※平成19年8月導水開始

今回導水開始  
石狩川ルートの目的  
・茨戸川上流・中部流域の水質改善  
※平成22年度導水開始  
石狩川ルート

石狩川ルートの目的  
・茨戸川の水質改善  
・札幌北部地区河川の浄化（維持）用水  
（保寿川、新等川、発寒川、三浦川、ほか）  
※平成22年度着手

清流リネッサンスII事業（石狩川ルート）の概要

石狩川の旧川である茨戸川は水が滞留しており、水質が悪化しやすい傾向にあります。そのため、豊平川や石狩川から導水し、茨戸川を浄化します。

石狩導水樋門（石狩川ルート）は石狩川から茨戸川に導水し茨戸川を浄化することを目的に造られました。

①茨戸川の遡上（H11年完了）

②浄化用水の導水  
石狩川ルート

③下水処理の高度化  
○処理方式の改善  
○汚濁処理の集約化

④浄化用水の導水  
創成川ルート  
（平成19年度導水開始）

⑤下水処理の高度化  
○合流改善  
伏古川浄化槽の移設  
（H16年運転開始）  
○高度処理  
ステップ方式入流式硝化脱窒法



- 2) ニュース性、記者発表のタイミング  
 導水開始の前日の報道機関への記者発表だったので、ニュース性は高かった。
- 3) 説明内容及び資料のレイアウト  
 説明文は若干長めではあるが、わかりやすい。レイアウトは、写真と図を組み合わせビジュアル的な工夫をしているが、情報量が多く、ポイントがつかみづらい印象を受ける。

- 4) 取材対応  
 取材のあった報道機関には、事業の概要を詳しく説明し、現場感をつかんでいただいた。丁寧な取材対応で記者から謝意があった。

- 5) 検証結果  
 見出しの工夫不足で「77年ぶり」が前面に出ていなかったこと、報道提供資料のボリュームが多かった点はあるものの、ニュース性は高く、その他の点では満足する内容であった。

(4) 「札幌駅前通地下歩行空間の現地見学会を実施します～西野小学校5年生53名が校外学習として参加します～」(9月28日、札幌開発建設部で記者発表、札幌開発建設部札幌道路事務所)

【報道機関提供資料(表紙)】



- 1) 見出しについて  
 見出しは一見すればすぐわかるタイトルであり、サブタイトルの「西野小学校5年生53名が校外学習として参加します」で、報道機関は「絵」に

なる(映像に映える)ことが想像できる。  
 サブタイトルの工夫で興味を誘う見出し(タイトル)となっている。

【報道機関提供資料(2頁)】



- 2) ニュース性、記者発表のタイミング  
 現地見学会は10月5日午前の開催であったが、小学生を対象としたものであり「絵」になること、報道機関も工事の進捗状況への関心が高く、記者も取材しながら現場を見ることができることなどから、ニュース性も高かった。
- 3) 説明内容及び資料のレイアウト  
 資料の説明文は、簡潔明瞭である。レイアウトについては、地図、図面も明確で、見やすい資料である。
- 4) 取材対応  
 工事の概要や現地見学会の集合場所など、報道機関からの取材に迅速に対応している。報道機関に、現地見学会の内容や現場の工事の状況などを積極的に説明している。
- 5) 検証結果  
 テレビのニュースで大きく報道され、新聞でも記事が掲載された。「2(2)広報にあたり留意すべきこと、心がけること」の各項目のうち、4)取材対応に関しては特筆するものはないが、誠実な対応が大きかったと考えられる。その他の項目は満足したものであった。

(5) 「新千歳空港 デアイシングエプロンの整備～日本で初めての防除雪氷作業用の専用エプロン～」(12月3日・局長定例記者会見、港湾空港部空港課)

【報道機関提供資料(2頁～3頁)】



1) 見出しについて

報道提供資料の表紙は、掲載を省略するが、見出しは報道提供資料の2頁の一番上のおりサブ

タイトルで「日本で初めての」と「初」ものを強調し、どのようなものが整備されたかが一見してわかり、興味を誘い、関心を持つ見出しになっている。

2) ニュース性、記者発表のタイミング

新千歳空港で今年度整備したデアイシングエプロンは、12月16日から供用開始であり、12月3日の記者会見のタイミングでの話題提供であったので、ニュース性は高かった。

3) 説明内容・資料のレイアウト

資料の説明文については、文章が長い印象を受ける。

レイアウトについては、写真と図、絵を工夫し、見やすい資料である。

4) 取材対応

整備の概要や写真の提供など、報道機関からの取材や依頼に迅速に対応している。

5) 検証結果

新聞で大きく報道され、テレビでもニュースで報道があった。説明文が長いという点があり、「2(2)広報にあたり留意すべきこと、心がけること」の各項目のうち、「1) ③文章は短く、1文三行以内に止めること」について徹底してアドバイスすべきであったと思われる。

4. まとめと今後に向けて

1) 見出し(タイトル)で注目を引くことは何よりも

重要である。なぜかという、注目を引けば中身も読まれるからである。だからこそ見出しの創意工夫に意味がある。タイトルとサブタイトル、いかに工夫して興味の沸くタイトルを考えるか、ここが大きなポイントである。

情報の内容を凝縮させて見出しでわかりやすい表現で示す、こうした「見出しの工夫」が、まさにきらりと光る広報の取組の第1歩である。情報発信する側と情報を受ける側、双方の視点から見て、自分が作った見出し(タイトル)がわかりやすいものかどうか、複眼的に見直してみる、そういったことを心がけるべきである。

5件の広報事例は、いわゆる“初”ものか否かなど、内容によりタイトルの付け方で興味や関心の持たれ方に差が出てくるものの、それぞれ工夫がみられ、一見して内容がわかるものとなっている。

報道提供資料の作成にあたっては、今後とも見出しの工夫に重点をおくべきである。

2) ニュース性・発表のタイミングという点では、

広報事例の2つ目の直轄河川堤内排水路の総点検結果はニュース性はあまり高くなかったが、その他

はニュース性が高く、発表のタイミングも適切であった。

なお、事例3の茨戸川の水環境改善はニュース性は高かったが、残念ながらテレビの取材はなかった。

ニュース性、旬な話題という点で、発表のタイミングと現場の取材の誘導は極めて重要であり、適切なタイミングでの記者発表を常に心がけていかなければならない。

- 3) 説明内容及び資料のレイアウトについて、説明文では専門用語は極力使わず、長い文章は避け、簡潔でかつわかりやすい説明文を書くよう、努めなければならない。1文は三行以内が望ましい。

また、資料のレイアウトにより記者の関心が高くなるので、写真を大きくしたり図やデータを組み合わせるなど、見やすいレイアウトの工夫に意を用いるべきである。

事例1、事例2及び事例4は説明文も簡潔で、かつレイアウトも見やすく、わかりやすい資料となっている。

- 4) 取材対応について、記者発表をきっかけに、記者の方々に関心を持っていただき取材をしてもらい、ひいては報道を介して国民・道民の方々に知っていただくために、少しでも大きく報道していただくことは広報担当職員として最も大切なことである。このため、記者発表資料の作成とともに、誠実な取材対応が重要である。

5件の広報事例のうち、取材対応のなかった1件を除き、こうした対応がその後の報道につながったものと考えられる。特に1つの事例では、取材後、記者から丁寧な対応に謝意があったところである。

## 5) 報道状況

### ①新聞で多く報道（テレビ報道あり）されたもの

- ・事例1 船舶版アイドリングストップ
- ・事例5 新千歳空港デアイシングエプロン

### ②テレビで多く報道（新聞報道あり）されたもの

- ・事例4 札幌駅前通地下歩行区間

### ③新聞のみでの報道

- ・事例2 直轄河川堤内排水路の総点検結果
- ・事例3 茨戸川水質改善

報道の状況について、いわゆる“初”もの（①の2事例）については新聞での報道が多く、絵になるもの（②の1事例）についてはテレビでの報道が多かった。

これらは、広く一般の方が初めてのものや絵となりわかりやすいものへの注目が高く、すなわち報道機関にとっても“初ものや絵になるものがやはり関心が高いということにほかならない。

## 5. おわりに

北海道開発局職員が広報の取組を行う際の心がけは何かといえば、とにかくにも「わかりやすく、理解してもらえる広報」を通じ、広く国民・道民の皆様に北海道開発事業について御理解を深めていただきたい、ということである。

伝えたいことをわかりやすく伝えるために、広報においてどういう工夫をすべきか、どういう点を心がけていけばよいのかを具体的に5件の広報事例から見てきた。

インパクトのある広報、すなわち、わかりやすくかつ目に留まりやすい広報を行っていくためには、報道機関や一般の方の立場に立った、情報発信、ポイントを絞った報道提供資料の作成に心がけることなど、広報担当職員が留意すべき点は数多い。

繰り返しになるが、報道提供資料については、専門用語はなるべく使わない、文章は短く、わかりやすいものとし、見やすいレイアウトとするなど、広報する内容に応じて常に創意工夫し、情報の受け手にとってよりわかりやすい情報となるようにしていかなければならない。

北海道開発局職員一人ひとりが「きらりと光る広報の取組」を実践して広報技術のスキルアップ向上を図っていくことにより、国民・道民の皆様の当局における事業への理解がより深まり、当局の事業の推進に寄与するものと考えている。